

2011 年度日本国際理解教育学会特定課題プロジェクト研究、公開研究会発表題目

タイトル「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」
英文：Study Tour and Tourism in International Education

プロジェクトの目的と概要

1. 本研究の理論的背景

本研究は、共通テーマである「共生社会の構築と国際理解教育」と深く関連している。本研究が取りあげる「海外研修・スタディツアー」は、交流という実践的な行為を通して、彼我の社会や文化の理解を促し、地球社会に共に生きる視線の獲得、態度の形成をめざそうとするものだからである。その意味で、国際理解教育の実践の重要な要素をなすものと考ええる。

しかしながら、その実践は、ともすれば個々人の体験におわっており、経験のふりかえを通じた理論化をめざす研究は少なかつた。本研究は、このような実践的、理論的課題に応えようとするものである。

2. 本研究の目的と問題意識

本研究の最終目的は国際理解教育におけるツーリズムを通じた学び論の構築である。本研究の問題意識は、(1) 海外研修や国際交流として実施されている国際理解教育の学習活動を、「スタディツアーとしてのツーリズム」と捉え、その内容と方法上の意義と課題を明らかにする。(2) 参加者の体験の経験化と発表、表現を通じた学び論（理論）を構築していく。(3) 最後に、スタディツアーの内容と方法、学びを教え方に転換していく方略（メソドロジー）も理論的に明らかにする。

3. 研究において明らかにしたい論点

具体的には次のような研究上の問いをたて、議論していくこととする。

・内容論上の問い

学校における学習プログラムとしての海外修学旅行や海外研修の目的やねらい、成果はなにか。

NGO のスタディツアーはなぜオルタナティブであり、他とどう異なるのか。

・学び論上の問い

スタディーツアーをよりよいものにするためにはどのような仕掛けが必要なのか。教員の海外研修は、海外研修やスタディーツアーの学びをどう構成すればよいのか教材開発や授業に役立っているか。

・方略論上の問い

学校や大学は、NGO など外部のプログラムをどう評価し、どう活用しているか。

2011 年度第 1 回公開研究会

11 月 27 日（日曜）時間 1230-1630

（会場：同志社女子大学今出川キャンパス純正館 S506 教室）

（京都市営地下鉄烏丸線今出川駅徒歩 10 分）

1. 松井克行（大阪府立旭高等学校）「イギリス語学研修の学びについて」（仮題）
2. 橋崎頼子（神戸大学非常勤講師）「双方向の学びを目指したスタディーツアーの事例分析」（仮題）

3. 織田雪江（同志社中学校・高等学校）「スタディ・ツアーの成果と課題を考える—『アジア国際夏期学校』の取り組みを事例に」
4. 藤原孝章（同志社女子大学）「タイ・スタディツアーにおける構成的学び—同志社女子大学授業科目「海外こども事情」の場合—」
5. 山中信幸（柳学園中学校・高等学校）「教師海外研修の意義とその活用」（仮題）
6. 金田修治（大阪府立三島高等学校）「NGO と連携したボルネオ・スタディツアーにおける教師の学びと国際理解教育」
7. 中山京子（帝京大学）「多様な視点をどう織り込むか：グアムスタディーツアーを事例に」
8. 研究の枠組みづくり

2011 年度第 2 回公開研究会

12 月 18 日（日曜）時間：1230-1630

関東地区（会場：東京学芸大学附属世田谷小学校）
（東急東横線自由が丘駅から東急コーチバス）

1. 堀幸美（江別市立大麻東小学校）「ダンザニアスタディーツアーからの教材～小学校での実践～」
2. 居城勝彦（東京学芸大学附属世田谷小学校）「パールハーバーワークショップでの学びを生かした中学校音楽科の活動」
3. 藤原孝章（同志社女子大学）「タイ・スタディツアーにおける構成的学び—同志社女子大学授業科目「海外こども事情」の場合—」
4. 中山京子（帝京大学）「多様な視点をどう織り込むか：グアムスタディーツアーを事例に」
5. 大滝修（松陽高校）「カンボジア・スタディーツアーと協同ゼミナールについて」
6. 栗山丈弘（文化学園大学）「国際観光動向における海外スタディーツアーの意義について」
7. 研究の枠組みづくり